

「大フィンランドは祖国と同様である」

——エルモ・カイラとカレリア学徒会の地域構想

石野裕子

はじめに——地域構想としての

「大フィンランド」とカレリア学徒会

近年の研究で、現在のヨーロッパ統合につながる地域構想がさまざまな形で戦間期のヨーロッパ各地で発生し、ヨーロッパ統合の再編案も多様性を帯びていたことが明らかにされてきた。しかし、その一方で、第一次世界大戦後ヨーロッパに誕生した新興独立国家において、膨張主義的色彩を帯びた地域構想も同時期に登場した。すなわち、パン・ヨーロッパ主義と並走する形でこのような地域構想がヨーロッパ内において語られていたのである。しかし、膨張主義

的な地域構想は果たしてヨーロッパ統合と相反する構想にすぎなかったのだろうか。ここではヨーロッパ、あるいはヨーロッパ統合はどのように考えられていたのであるうか。

以上のような疑問から、本稿では、第一次世界大戦後に独立した新興国家の一国フィンランドにおいて幅広く支持された地域構想「大フィンランド」に注目する。

初めに「大フィンランド」の誕生と変遷について説明したい。フィンランドは、六世紀の間スウェーデンに、一九世紀初頭から約一世紀もの間ロシア帝国に統治されてきた北欧の一国である。ロシア統治時代初期から中期にかけて、フィンランドは「大公国」として比較的自由な自治を享受していたが、その時期に「大フィンランド」が知識人

の間で構想されていた。

「大フィンランド」は、そもそもフィンランド人の「近親民族」との連帯思想から発した地域構想である。「近親民族」の主な対象は、フィンランド東側に位置するロシア・カレリアに居住するカレリア人であった。¹⁴「近親民族」という発想自体は、一八世紀以前のスウェーデン統治時代にすでに一部の知識人の間で見られたが、前述したように一九世紀中葉のロシア帝国統治時代において、「近親民族」の連帯を基盤とした「大フィンランド」思想が徐々に発展し、人々に広まっていった。当時フィンランドでは、知識人たちが支配階級の言語かつ自分たちの母語であるスウェーデン語ではなく、土着の言語であったフィンランド語を中心とした民族運動を展開しており、同系言語を話すとされた「近親民族」との連帯思想は民族運動と運動する形で広がりを見せた。しかし、実際、ロシア・カレリア北部に居住するカレリア人が話すカレリア語はフィンランド語と一部類似性が見られるものの、カレリア語自体、地域によってかなり異なりがあり、統一がなされていない言語であった。また、カレリア人の風習といった文化的要素もロシア側の影響の方が強い状況にあり、フィンランド人のものとは異なる部分が多かった。しかし一方で、フィ

いったさまざまな知識人が中心となって構想されていた思想で、また、論者個人個人がそれぞれの「大フィンランド」像を掲げていたため、統一された思想ではなかった。しかし、戦間期において「大フィンランド」は単に構想されただけではなく、民間団体によってその実現が試みられた点に特徴が見られる。それゆえ、その実践がどのような論理でなされていたかに注目することで、当時の「大フィンランド」の実態を考察したい。

そこで本稿では「大フィンランド」の実現を目的としたカレリア学徒会 (AKS: Akateeminen Karjala-Seura) という団体に注目し、その団体がどのような考えのもと「大フィンランド」を掲げていったのかを考察するにあたって、設立初期の「大フィンランド」像を取り上げる。

カレリア学徒会は、独立直後の一九一八年の一月に勃発した内戦の最中に東カレリア遠征¹⁵に参加したヘルシンキ大学の学生が中心となって、一九二二年に設立された右翼団体である。最盛期には四千人もの会員を有したとされ、会員は大学卒業後もその活動を継続することが多かった¹⁶。政界、官界、ジャーナリズムなど多くの業界にその勢力を伸ばしていった。カレリア学徒会は、一九四四年九月のモスクワ休戦協定後、連合国側から「ファシズム団体」

ンランド民族叙事詩『カレワラ (Kalevala)』の原詩である口承詩の謡い手がロシア・カレリアに主に居住していたことから、その地がフィンランド民族文化の「発祥地」であり、カレリア人はフィンランド民族文化を保持してくれた「近親民族」として、フィンランド内では認識されていたのである (石野二〇一三: 三三―三三三)。

一九世紀終わりにロシア帝国のフィンランド統治方針が変更されたことによって、自治を剥奪される危険を察知したフィンランド人知識人たちは、防衛的見地から「大フィンランド」¹⁷、すなわち「近親民族」が居住する地域ごとフィンランドに含めようとする構想に転換する。つまり、「大フィンランド」の意味合いが変容していったのである。

さらに「大フィンランド」は、一九一七年の独立直前から単なる連帯思想にとどまらず、政治的、軍事的動向と結びついた形でフィンランド人の間で共有されるようになる。この地域構想は、他の北欧諸国との連帯地域構想である「スカンディナヴィア主義」とは明らかに一線を画すものであり、第二次世界大戦期においては反ソ、反共主義と重なる形で、フィンランド社会全体に影響を及ぼす膨張主義的性質を有する思想へと変貌した。¹⁸

「大フィンランド」は歴史学者、民俗学者や地理学者と

と見なされ、解散させられるまで、戦間期のフィンランド社会において代表的な右翼団体でもあった。また、間違いなく戦間期の「大フィンランド」を牽引した団体である。それゆえ、カレリア学徒会の活動から当時の「大フィンランド」の実態を考察するという視点は有効であるといえるが、その一方で、カレリア学徒会の活動の多様性が彼らの「大フィンランド」を見えにくくしている。つまり、後述するが、会員一人一人の考えが異なったため、内部で対立や分裂が生じ、組織の改変がしばしば起こったという事実が存在する。

以上のような状況を鑑みて、本稿では、カレリア学徒会の結成初期における「大フィンランド」の言説、なかでもカレリア学徒会初期の活動を牽引した二代目会長¹⁹のエルモ・カイラ (Elmo Edvard Kaila, 1886-1935) の言説および彼が会長を務めた時期であるカレリア学徒会初期の「大フィンランド」像に注目する。

カイラは、独立直後に勃発した内戦時に義勇兵としてロシア・カレリアに遠征した経歴を持ち、遠征によるロシア・カレリア「獲得」に失敗した後に結成されたカレリア学徒会で中心的な役割を果たした人物である。

本稿では、カレリア学徒会という右翼団体の初期の活動

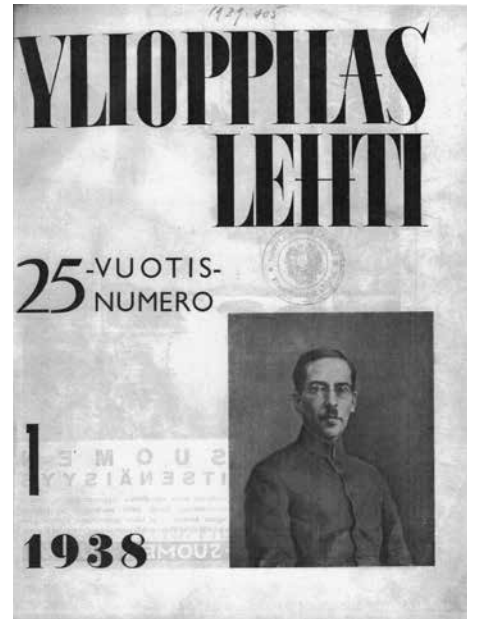


図1 エルモ・カイラ

(出所) *Ylioppilaslehti* 1938.
(注) 1938年の『大学生誌 (*Ylioppilaslehti*)』25周年記念号の表紙としてエルモ・カイラの肖像画が掲載された。同雑誌では、カイラのイエーガー隊（第一次世界大戦期にフィンランドで結成された義勇隊）および内戦期の活動、カレリア学徒会での活動の業績を称えており、没後もカイラは大学生にとって英雄的存在であったことが窺える。

を牽引したカイラを中心に、「大フィンランド」の実現を目指したカレリア学徒会のイデオロギーに注目することで、戦間期フィンランドにおける膨脹主義的な地域構想の一例を提示したい。

本論に入る前に先行研究について言及する。上述したように、カレリア学徒会は一九四四年にファシズム団体に認定され、解散させられた後、大部分の関連資料は破棄され、一時期は忘れられた存在となった。しかし、一部の資料はヘルシンキからミルク缶に詰められて、極秘に南ポロヤンマーに送られ、そこで地中に埋められる形で保存された[※]。それらの資料は、カレリア学徒会研究が本格的に始まった一九七〇年初頭に収集された。戦争史料館およびフィンランド文学協会などに点在していた関連資料、個人所蔵の資料等もヘルシンキ大学図書館（現国立図書館）に移され、保存された。

カレリア学徒会に関する研究自体は、一九七三年に出版されたリスト・アラプロの社会学の博士論文『カレリア学徒会——一九二〇～三〇年代における大学生運動と民衆』が先駆的な研究として挙げられる。同書によって、これまで謎に包まれていたカレリア学徒会の実態が明らかになった。学生団体としてのカレリア学徒会に注目する研究も登

場し (Klinge 1978)、カレリア学徒会の実態解明が進む一方で、フィンランドの外では、カレリア学徒会は概して両大戦間期のフィンランドにおけるファシズム団体として紹介されてきた (例えば Morgan 2003: 86-90)。イギリスの歴史学者デイヴィッド・カービーは、カレリア学徒会は「ボリシエヴィキの支配に対する蜂起の失敗によって東カレリアから逃れてきた避難民を救済するために設立され、その後の一〇年にわたって男子学生にとって最も重要な討論の場となり、またエリートが集う場でもあり、会員の多くはフィンランド社会で高い位置を占めるようになる」と評している (カービー 二〇〇八: 二二二)。

そのような研究に対して、二〇〇四年にヘイッキ・エスケリネンが著した『我々はフィンランド国家を大きくすることを望んだ——カレリア学徒会の歴史I』では、カレリア学徒会のOGクラブである「クラブ二二二 (Kerho 22)」の関係者から提供された新たな資料を用いて、カレリア学徒会の全容解明がなされた。エスケリネンは、カレリア学徒会の思想的ルーツを、独立以前のフィンランド国内の思想潮流を受けて築かれた運動と規定し、これまでいわれていたようなファシズム組織ではないと主張した (Eskelinen 2004: 353-365)。たしかにエスケリネンが主張したように、

カレリア学徒会が掲げた思想はフィンランドで発生した民族運動の思想潮流に位置づけられるが、実際の活動、特に一九三二年以降の活動を見る限り、ファシズム組織としての会の性格を否定できないだろう[※]。

また、二〇一一年に、ミッコ・ウオラが編纂した『AK Sの道——祖国と民族思想上のカレリア学徒会』が出版され、カレリア学徒会の行動ごとの詳細な分析がなされるなど、カレリア学徒会に関する研究は未だ資料が十分でないなか進展している状況にあり (Uola 2011)、現在も注目されている学生団体であるといえる。

カイラ自身については、上記の文献においてその名がしばしば登場し、また、マルッティ・アハティによる評伝が一九九九年に発表されたが (Ahti 1999)、彼の思想に特化した研究自体は筆者が確認した限り出ていない。しかし、カイラはカレリア学徒会が急成長した初期の立役者であり、彼の思想に注目することはカレリア学徒会初期の「大フィンランド」像の解明にもつながると考える。

本稿では上述した先行研究に依拠しつつも、カイラが執筆した記事およびカレリア学徒会が発行したプロパガンダ冊子を資料として用いることで、会が描いた「大フィンランド」像を考察する。

I エルモ・カイラとカレリア学徒会

1 カレリア学徒会入会前のカイラの軌跡

カレリア学徒会において二代目会長（一九二三～二七年、二八～三〇年）を務めたエルモ・カイラは、初期のカレリア学徒会のイデオロギーを形作った中心的人物である。政治家ではなかったカイラは、研究方面でもフィンランドでその名が知られているわけではない。しかし一方で、カイラはカレリア学徒会の会長として非常に重要な役割を果たした人物であり、また、「ロシア人憎悪（Rysanshita）」というスローガンを前面に押し出した人物として知られる。彼の反ソ、反共主義の徹底ぶりを指して、フィンランドのヒトラーになぞらえる極端な研究も見られるが（Viranen 2005）¹⁰。本稿は彼のカレリア学徒会での活動および彼が会長を務めた時期の会の「大フィンランド」像に焦点を当てる。

始めに、カレリア学徒会入会以前のカイラの軌跡の概要

かい、イエーガー隊の活動を支えるために働き、内戦が終わる間際にヘルシンキに戻った。ミュツリユによると、カイラは独立政府がドイツを敵と見なす一方で、西側諸国を友人と見なしていることを批判し、ドイツおよびドイツ国民の援助のみが東カレリア（フィンランドにおけるロシア・カレリアの呼称）を獲得する可能性につながるものであると主張したという（Mylly 2004: 680）。また、カイラは保守組織である市民警備隊（Suojeluskunta）にも属するなど、独立以降も積極的に愛国運動に関与した。

カイラの活動で特記すべきことは、一九一九年から二〇年にかけてロシア帝国時代に仕えた軍の将校たちを追放し、その代わりに元イエーガー隊の隊員を軍の司令部に送り込もうとするキャンペーンを掲げ、イエーガー隊時代の人脈を駆使したり、保守系の雑誌に寄稿したりするなどして精力的に活動したことである¹³。カイラは、独立フィンランドにとって「ロシア的なるもの」を排除すべきという信念のもと、国防に携わる軍の「浄化」を目指したのである。

以上のように、カイラはカレリア学徒会創設前から反ソ的感情を強く抱いており、その感情がカレリア学徒会の活動方針に反映されたといっても過言ではない。

を示す。一八八八年に牧師の家に誕生したカイラは、一九〇五年にヘルシンキ大学に入学し、一九〇八年に哲学博士候補生となる¹¹。一九〇九年にカイラはオタヴァ出版社に入社し、地理部門の編集者となる。一九一七年のロシアでの三月革命後、カイラはフィンランド独立を射程に入れて結成された義勇隊であるイエーガー隊に入隊し、ドイツで実施された軍事訓練にも参加する。カイラの行動は当時の愛国心が強い大学生の行動そのものであり、それほど特異なことではない。しかし、さらにカイラは独立支持派の新聞『ウーシ・バイヴァ（Uusi Päivä）』の秘書としても働き、また、イエーガー隊の活動を支えるために、一九一七年六月からウーシ・メツウサ・トイミストでも働き出す。この会社は実態がほとんどなく、イエーガー隊のために秘密裏に活動を行うための隠れ蓐的な会社であった。九月には勤務していたオタヴァ出版社のカイラの部屋に住所を構え、そこでカイラはイエーガー隊のために書簡のやり取りを秘密裏に引き受けていた（Ahti 1999: 54）¹²。

一九一七年一月にフィンランドが独立し、翌年一月に内戦が勃発すると、カイラはラジオを利用してドイツおよび白衛隊側と連絡をとる役割を果たす。三月終わりに、カイラはエストニアのタリンに渡り、そこからベルリンに向

2 カレリア学徒会の二代目会長就任

カイラが一九二〇年代に深く関わったカレリア学徒会は、繰り返しですが、内戦期に東カレリア遠征に参加した経験を持つヘルシンキ大学生が一九二二年二月二二日に結成した組織が発原点である¹⁴。彼らは一九二〇年にフィンランド・ソ連間で締結されたタルトゥ条約で、ロシア・カレリアのレポラ、ポラヤルヴィの「自治」¹⁵が承認されたことに不満を抱いたことがきっかけで、会の結成に至った。同会は、同年の三月九日から「カレリア学徒会」という名称で呼ばれるようになる。会の当初の目的は、ロシア・カレリアからフィンランドに避難してきた難民の救済および彼らの教育であった（Ahti 1999: 255）¹⁶。その資金作りとして、会は難民の救済のためのポストカードの販売などを手がけたり、夏に地方を巡回したりする活動を行った（Ahti 1999: 356）¹⁷。

アラプロによると、カレリア学徒会は内戦後の右派の反ソの一部として誕生したという（Alapuro 1973: 99）。会のイデオロギーは、多くの点でフェンノマンと呼ばれた一九世紀のフィンランドのナショナリズムからの伝統につなが

表1 カレリア学徒会会員の所属大学内訳

所属大学名	割合(%)
ヘルシンキ大学	74
工業高等専門学校	11
商業高等専門学校	3
トゥルク大学	3
陸軍学校および海軍学校	7
ユヴァスキュラ教育高等専門学校	2
合計	100% (約2,920人)

(注) 他の高等専門学校生は集計に入っていない。
(出所) Alapuro (1973: 59) の表をもとに筆者作成。

るとい¹⁸。また、同会には、内戦の影響でフィンランド国内の統合がうまくいっていない状況を憂慮した若者が集っており、彼らは自分たちの共同体(ゲマインシャフト)を結成したいという要求を抱えていたという。一九二三年の終わりにはまだ会員数は二一四人にすぎなかったが(Alapuro 1973: 101)、徐々に会員数を伸ばしていった。また、ヘルシンキ大学の学友会が一九二六年初めにようやく設立されたことからいえるように、カレリア学徒会は独立以降の大学生の学生運動の中心的な存在として発展した(Alapuro 1973: 58)。表1から分かるように、会員は主に

ヘルシンキ大学の学生であり、会員の父親の職業別では大学教授といった「自由業」の父親を持つ会員が二五%と最も高いが、商業や手工業者が一九%、農民が二〇%といったように、これまでのエリートではない層の会員が一定の割合を占めていた。

このことは独立以降のエリート層の変化と連動している。独立以前、フィンランドにおいて大学に通うエリート層は、スウェーデン語を母語とする元貴族階級出身者が大多数を占めていたが、独立以降、大学の「大衆化」が起こり、農民や牧師の家から大学生を輩出することになる。つまり、カレリア学徒会が発展した過程は、独立フィンランドにおいて新たなエリート層が誕生してきた過程と重なるのである。また、カレリア学徒会は、冷戦期に活躍したウルホ・ケッコネンなどの政治家や、民俗学者であり学生時代から詩人として活躍したマルッティ・ハーヴィオといったように多くの知識人を輩出した団体でもあった¹⁹。

以上のような会員で結成されたカレリア学徒会は、カレリア難民救済という目的から始まり、続けて三つのイデオロギーを掲げるようになる。一つには、国を守る意志の強化、二つ目にはフィン・ウゴル問題、すなわち「大フィンランド」である。そのなかには、東カレリア、すなわち口

シア・カレリアのソ連からの「解放」や、「近親民族」国家であるエストニアとの友好などが包含される。最後は、「純正フィンランド性 (Aitosuomalaisuus)」の確立である。上述したように、フィンランドは歴史的経緯から、少数派のスウェーデン語を母語にするフィンランド人(以下、スウェーデン語系フィンランド人と略)が支配階層に位置していた。しかし、独立直前から、農民や商人の家から大学生が誕生するなど、これまでのエリート層ではない階層出身者が大学に入学するようになった。彼らの多くはフィンランド語を母語とするフィンランド人(以下、フィンランド語系フィンランド人)で、卒業後は親の仕事を引き継ぐのではなく、官庁や大学等に勤めるようになった。

すなわち、フィンランド語系フィンランド人が知識階層に上昇するようになるのである。むしろ、カレリア学徒会の会員のなかにもスウェーデン語系フィンランド人は存在したので、会はスウェーデン語の全面的排除を目的としたわけではなかった。フィンランド語を国の第一言語にすることで、国内の統一を目標に掲げたのである。

以上のような三つのイデオロギーを掲げたカレリア学徒会であったが、会員はそれぞれのイデオロギーに肩入れすることにになり、同時に三つのイデオロギーを推進するとい

うわけではなかった。特に「純正フィンランド性」をめぐっては、当初から会員間で意見が分かれており、後述するが一九二〇年代後半からは大きな議論を巻き起こすことになる。

そのようなカレリア学徒会が活動を始めた最中、カレリア学徒会の創設メンバーではなかったものの、「ロシア人嫌悪」キャンペーンを勢いにのせており、その道ではすでに著名であったカイラに白羽の矢が立ち、一九二三年の選挙で会長に選出されたのであった。

II 会長就任後のカイラと「ロシア人憎悪」

会長就任後、カイラは、まず会内に「憎悪の兄弟 (Vihan veljet)」を結成した。この組織は会結成以前から行っていた反ソ・キャンペーンを継承したものであり、秘密裏に結成されたものであった²¹。

前述したように、カイラのロシア(ソ連)への嫌悪感が独立以前から強いものであったことは、カレリア学徒会結成前の一九一八年に寄せた「イエーガー隊、独立運動、内戦……「我々は」憎悪せずにはいられるのか?」という疑問

で始まる論考からも明らかであった。カイラは、「憎悪によってイエーガー隊はドイツに渡航でき、防衛組織を結成し、内戦を勝ち抜いたのである——それらは敵に対する祖国の永遠なる憎悪である。もし我ら民族が生き残りたいのであれば、我々はなお「ロシアを」憎まなくてはならない、盲目的に、そして継続的に（「」は著者による補足）」(Ahti 1999: 184)と述べ、ロシアへの憎悪こそがフィンランドにとって不可欠であると説く。フィンランド独立を目標に結成されたイエーガー隊に所属し、内戦期には白衛隊に属し、ロシア・カレリアに遠征したカイラにとって、ロシア(ソ連)は憎悪すべき対象であり、その憎悪こそがフィンランドの独立を維持できる精神的拠り所となると説いたのであった。

以上のような考え方は、一九二三年に発行されたカレリア学徒会の会報誌『フィンランド民族』に発表した「フィンランド民族の仕事」と題した短い論考にも見出せる。本論考で、カイラは国家と民族の関係について以下のような表現をする。

「脅威を与える未熟な東の民族に対抗した、西洋諸国文化の前哨地帯となったハンガリーでの二つの兄弟

民族の絶望的な戦いは、マジヤール人のすばらしい土地に破壊をもたらしたが、最終的な戦いをももたらしたのである。フィンランド人の『ロシア野郎』との数千年にわたる戦いは血まみれの戦いであり、ハンガリー人の戦いより非常に危険であったが、戦いはまだ終わっておらず、その終わりはまだ見えない」(Suomen Heimo 1923: 116)。

以上のように、カイラはロシアとフィンランドの戦いを表現する。続けて、カイラは、「我々の祖先は戦いを望み、勝つことを望んだが、自分たちの国の主人として戦っておらず、独立フィンランドの側で戦ってもいなかった」と自省し、さらに「我ら民族には自由と平和があるか」と自問自答し、「ない」と答える。なぜならば、『ロシア野郎』がこの五年の間に外に移動したわけでもなく、奴らがフィンランドに自由と平和を残したわけでもない、奴らは東の奴隷的なもの、東の『無責任な行為』、東の貧困より悪いもの、すなわちロシア的なものをフィンランドに残したのだ」と強調する。そして、カイラは「来たべき戦い」のために、「民族感情の強化、積極的な祖国愛、すなわち『ロシア人憎悪』の必要性」を訴えるのであ

る (Suomen Heimo 1923: 116)。

以上のように、カイラはカレリア学徒会においても反ソ・キャンペーンを続け、「ロシア人憎悪」という感情的要素を強調することで、会の活動のイデオロギーを強化していったのであった。

Ⅲ 『大フィンランドは祖国と同様である』

以上のように、カレリア学徒会において、カイラはもっぱら「ロシア人憎悪」キャンペーンに力を注いだが、カレリア学徒会全体で共有された「大フィンランド」像はいかなるものであったのだろうか。

カレリア学徒会初期における「大フィンランド」像を知る上で注目すべきは、カイラが会長に就任した年である一九二三年に刊行された『大フィンランドは祖国と同様である』という題名のプロバガンダ冊子である (AKS 1923)。全四〇頁からなる同冊子は、カレリア学徒会の主要会員が寄稿した形式となっており、全一一編のうち四編が演説録となっており。本冊子はむろんプロバガンダを目的としているため過激な表現が目立ち、かつ論考一つ一つが短く、

「大フィンランド」のみにテーマが絞られているわけではないが、それぞれ当時のカレリア学徒会の「大フィンランド」観を考察する上で重要な資料である。以下、本章では冊子に表れた「大フィンランド」像を分類して分析する。

1 「フィン・ウゴル民族」としての

「近親民族」、フィンランド民族、ヨーロッパ

本冊子の最大の主題は「近親民族」であるが、注目すべき点は「近親民族」の「解放」こそが、フィンランド民族の発展につながるという思考である。また、逆説的に「近親民族」の「解放」なくしては、フィンランド民族の未来はないという思考も見られる。

例えば、最初の論考「フィンランド民族の事柄——カレリアのヨーロッパ化」では、「フィンランド民族がまだ文化的に『太陽の元でひなたぼっこを始める』時ではない」と論じ、『ロシア化』されたカレリア人の危機の背後で、我々は太陽が昇るのを見ることはない」という比喩的な話が展開される (AKS 1923: 34)。最後には、ロシア帝国時代におけるフェンノマン運動の指導者スネルマンを、民族的覚醒を、そしてイエーガー隊二七部隊もまだ必要とする

と主張し、それらが「入手」できるなら、「北欧の文化的ヘゲモニーはフィン・ウゴル民族に移る」と締めくくる(AKS 1923: 45)。つまり、フィンランド人はカレリア人と一体になってこそ、「一人前」になり、さらに北欧の文化的ヘゲモニーをも握るという主張が展開される。また、ここでのカレリア人の「ヨーロッパ化」という言葉には、フィンランド人になるという意味が読み取れる。つまり、論者はフィンランド人自身をヨーロッパの一人と見なしており、カレリア人をソ連から「解放」し、フィンランドに組み込むことこそ、「ヨーロッパ化」につながるとしているのである。

また、ここでのフィン・ウゴル民族という言葉は、フィンランド人とカレリア人を指しているが、別の論考ではエストニア人も含めて論じられるなど、「近親民族」の範囲は論考によって異なるが、基本的にはフィン・ウゴル民族に同系言語を話す民族が共通して想定されている(AKS 1923: 5)。

イングリシアに居住する民族、すなわちイングリシア人については、「イングリシアの運命」という論考で取り上げられている。同論考によると、「もともと歴史上フィンランド民族はネヴァ川沿岸に登場し、別途カレリア人とハメ人が

「人類の発展が最終的に完了するまで戦争は必要である。完了後は、よい気分のまま息を引き取ることができるとする」(AKS 1923: 16)。

次に人類の戦争の歴史を語るなかで、「第一次世界大戦後、多くの小国家が独立を果たしたが、ロシアとその周辺では独立した国家は少ない」と語り、「ウクライナとカフカースの民族はモスクワの支配下に入っており、カレリアの解放のための努力は血まみれで抑圧された」と指摘する。さらに、「カレリアの解放が実現していないので、我々フィンランドの民族国家は完成していない」と主張し、そのために、『ロシア野郎』と再び戦わなければならない」とし、「人々への啓蒙活動と民族プロパガンダの必要性」を強調する。また、興味深いのは、現在のフィンランドを「小フィンランド (Vähä-Suomi)」と名づけ、『小フィンランド』は国家ではない、『大フィンランド』こそが国家であり、それゆえカレリアを見捨てることはできない」とする(AKS 1923: 15-20)。

「カレリア性における偉大なる理想について」という論考では、カレリア性について「フィンランド文化にとって重要であり、カレリア性を排除したらフィンランドの文化

ネヴァ川の前まで移動し、ネヴァ川の前でもフィンランド人トウオマス司教が勇敢にノヴゴロド王と競った」と指摘し、歴史的経緯からもイングリシアはフィンランドであったことを主張する。さらに、「イングリシアほど汚れていない民族感情が残っている地域はなく、またスウェーデン時代のフィンランドの宝である教会がイングリシアに残されている」とする。さらに「フィンランドの宝である民族叙事詩『カレワラ』を保持してくれた」という理由を挙げ、イングリシアとフィンランドとの文化的紐帯を強調する²²。最後に、「フィンランドの文化的遺産を保持してくれた恩に因るため、我々はイングリシアに『解放』という宝物を送らなくてはならない」と訴える(AKS 1923: 10-12)。つまり、本論考では言語的つながりだけでなく、文化的つながりという根柢を挙げてフィンランドとの紐帯を強調する。

このような「近親民族」との文化的つながりの強調は、「記憶は曲げられる」という論考でも見られる。本論考では、フィンランドの「ナシヨナリズムの父」とされるロシア帝国時代のナシヨナリストであるユリヨッコスキネンの以下の比喩的な表現を引用し、カレリア解放のための戦いの必要性を説く。

がやせ細ってしまう」と指摘する。それゆえ、「カレリアの『解放』こそが不可欠である」という他の論考と共通の認識を示す(AKS 1923: 21-24)。

以上のように、カレリア人を主な対象とする「近親民族」との連帯の実現こそが、フィンランドを真の国家にするという考えが共有されているといえる。また、ヨーロッパに関する叙述であるが、最初の論考ではフィンランドとヨーロッパを一体化して論じていたが、他の論考ではヨーロッパという言葉よりもむしろ「西洋諸国 (äinsinaat)²³」という言葉が、「東(三)」²⁴、すなわちソ連と対置される形で頻繁に出てくる。つまり、ヨーロッパは抽象的な形で表現されているにすぎず、実体としてのヨーロッパはここでは論じられていない。

2 「ロシア人憎悪」の表現

冊子全体の論調は、カイラが掲げた「ロシア人憎悪」色が色濃く反映されているが、「ロシア人憎悪」そのものを題名とした論考も寄せられている。

カレリア学徒会創設メンバーであり牧師でもあったエリアス・シモヨキが書いたとされる同論考は終始過激な言葉

で綴られている。シモヨキは、まず『ロシア人憎悪』はイエーガー隊精神、すなわちフィンランド人の精神であり、フィンランドを解放するものである」と説く。次に「フィンランドの大学生よ」と呼びかけ、「祖先の大なる祖国愛と敵に対する憎悪に感謝し、祖先の伝統を大事に育み、いっそう育成させる義務がある」と主張する。続けて、『ロシア野郎』を愛する必要はなく、憎悪するべきだ」と説く。また「愛と憎悪はメダルの裏表であり、『ロシア野郎』を憎悪することは国を愛することと表裏一体である」と主張する。最後にシモヨキは「憎悪と愛！ 奴らがどんな色であろうとも『ロシア野郎』に死を！」^{*24}といった挑発的な言葉を綴る（AKS 1923: 79）。

本論考ほどでないにせよ、このようなロシア人に対する憎悪は冊子全体に通底して見られるものであり、カイラが掲げた「ロシア人憎悪」の意図に沿ったものであるといえる。カイラ自身の論考は最後に掲載されているが、前述した『フィンランド民族』で発表した論考の焼き直しであり、語句など若干修正されているものの論調自体に変化は見られない。

以上のように、本冊子はプロパガンダを目的として製作されたという性質上、過激で読者を煽る表現が多々見られるが、カレリア学徒会初期の考えを色濃く反映したものであり、そこに見られる「大フィンランド」像は、以下のよう

- 一 「近親民族」であるカレリア人およびイングリシア人の「解放」
- 二 カレリア人が居住するロシア・カレリアのフィンランドへの併合
- 三 「ロシア人憎悪」に裏打ちされたフィンランド民族の真の独立および統一

以上のように、感情に訴える形で提示された「大フィンランド」像が、カレリア学徒会の当初の目標として掲げられたのである。

3 「大フィンランド」の地理的範囲

では、「大フィンランド」の地理的範囲について、本冊子ではどのように表現されているのであろうか。「大フィンランド＝祖国」という単純な呼びかけをしている論考もあるものの、地理的範囲を記述した論考も見られる。

前述した「記憶は曲げられる」という論考では、「大フィンランド」の東側境界線をラドガ湖と北海の間から始まり、ラドガ湖からオネガ湖を通って白海に至ると想定する。つまり、ヴィエナ・カレリアおよびアウヌス・カレリアを内包するロシア・カレリアを含んだフィンランドの領域を示す（AKS 1923: 20）。また、「フィンランドの夜明け」と題した論考では、シュヴァリ、オネガ湖、ラドガ湖沿岸のカレリア人の解放を強調しており（AKS 1923: 31）、上述した論考同様にロシア・カレリアを「大フィンランド」の範囲に含めることがわかる。

その一方で、冊子の性質からか、「大フィンランド」の主な地理的対象はあくまでロシア・カレリアに向けられており、フィンランド語系住民が居住するノルウェー北部のルイヤ、スウェーデン北部についての言及は見られない。

IV カレリア学徒会の分裂と 会の方向性の転換

前述したように、カイラは一九二七年九月から五ヵ月間、博士論文執筆に集中するため代表を一時退任する。

ちょうどその時期からカレリア学徒会は、以前から盛り上がりを見せていた「純正フィンランド性」運動にいっそう重点を置くようになり、会員の多くもその運動にのめり込むようになる。繰り返しになるが、「純正フィンランド性」運動とはフィンランド語を中心としたフィンランド民族文化の発展と強固な国家の創造を目的とするナシヨナリズム運動である（Hämäläinen 1968: 102）。同運動は、スウェーデン語系フィンランド人への言語的な弾圧を想定していたわけではないものの、彼らの「特権」をなくすことを目標として活動が展開された。一九二三年に「純正フィンランド性連合（Aitosomalaisuuden Liitto）」が発足するなど、カレリア学徒会の外でも活動が行われていたが、その影響が会にも及び、特に会員ニーロ・カルキ（Niilo Karki, 1897-1931）のテーゼ「国民の連帯」が取り上げられたことによって、一九二四年に内戦で生じた国内の分裂お

よび言語が分けられることで生じた国力の衰えを阻止する方針がとられた (Tommila 1989: 129)。それゆえ、基本的に会員の姓はフィンランド語風でなければならないと定めるなど、会におけるフィンランド語の使用が半ば義務化された (Hämäläinen 1968: 117)。

「純正フィンランド性」運動において最も力が注がれたのは、ヘルシンキ大学のフィンランド語化である。ヘルシンキ大学ではその歴史的経緯からスウェーデン語およびラテン語で授業がなされていたが、ヘルシンキ大学に進学するフィンランド語系フィンランド人が増加するとともにフィンランド語での授業も増加していった。しかし、「純正フィンランド性」運動者はヘルシンキ大学の措置はまだ不十分であるとし、内戦で二分されたフィンランド国内をまとめるには「フィンランド語」という言語を中心とすべきであり、エリートを養成する大学においてもフィンランド語系教授が優先して採用されるべきであり、また授業もフィンランド語が優先されるべきであると主張した^{*25}。

カイラ自身はこの運動を容認したものの、会内ではあくまで「ロシア人憎悪」に関連した活動に重点を置く姿勢は変えなかった^{*26}。また、同運動に反発する会員も存在したが、一九二八年からはヘルシンキ大学のフィンランド語化

カイラが代表を降りた直後の一九三〇年一〇月号のカレリア学徒会の会報誌『フィンランド民族』の巻頭に、「カレリア学徒会の目的」と題した囲み記事が掲載された。

「カレリア学徒会の目的は、カレリア民族およびイングリア民族の解放、エストニアとフィンランド国家との接近およびランシポホヤとルイヤに居住するフィンランド語系住民の権利の保障——すなわち、強固な国家的合意と文化的連帯とが結びついた大フィンランドである [傍点原文どおり、以下同様]」。

カレリア学徒会は、現状に影響に及ぼす信念を貫き、首尾一貫して目的に向かう「フィンランド語とスウェーデン語の」両言語集団が原則的に同等の権利を持ち、民族的感情が強化された国家は、全フィンランド民族の幸福な未来、すなわち大フィンランドの建設のために耐えうる唯一の基盤である (鍵括弧は著者による補足) (Suomen Helmo 1930: 209)。

つまり、カレリア学徒会は一九二三年に主張したよりも広い範囲を示す「大フィンランド」の実現を目標に掲げたのである。また、その一方でフィンランド内の連帯こそが

運動にカレリア学徒会が主導的に関与するようになり、会報誌『フィンランド民族』も「純正フィンランド性」運動、特にヘルシンキ大学のフィンランド語化をめぐる運動についての特集が続けて組まれるなど、「純正フィンランド性」運動に重点が置かれた。

そのような「純正フィンランド性」の盛り上がる背景には、「大フィンランド」実現の困難さが挙げられるだろう。「近親民族」の連帯を謳う「大フィンランド」は、非常に魅力的な目標であったが、その一方で実現が決して容易ではないことは明らかであった。それゆえ、まずはより確実に効果が早々に期待できるヘルシンキ大学のフィンランド語化運動に関心を惹かれる会員が多かったといえる。また、エリート層の言語を統一することによってフィンランド国内の連帯を図り、かつ強固な国家建設への布石を打つという意味合いをも見出せる。

カイラは一九二八年二月に会長の座に復帰したものの、心臓の病気が悪化したこともあり、一九三〇年九月初旬に代表の座を降りることを表明したが、病気だけではなく、会の「純正フィンランド性」運動への傾倒やそれに伴う会内の不和が重圧となったのもその一因であったとされる (Ahti 1999: 408, 463)。

「大フィンランド」に必要であると表明したのであった。「純正フィンランド性」運動が盛り上がるなか、このような意思を表明した背景は明らかになっていないが、使用言語による会の分裂を避けようという意思があったと窺える。このように、「大フィンランド」の実現という目標は、フィンランド語化運動の最中にも維持されていたのである。

おわりに

会長を辞任したカイラは、翌年の一九三一年に博士論文『一六〇〇〜一七〇〇年代のポホヤンマーと海 (Pohjanmaa ja meri 1600- ja 1700-luvulla)』を刊行し、同年に戦争史料館に職を得て、亡くなる一九三五年までその仕事を続けた。また、会長退任後の一九三三年に、カイラはカレリア学徒会の名誉会員に推挙された。

カイラの会長退任後、カレリア学徒会は大きな変革を迎える。一九三二年に勃発したマンツァラ蜂起と呼ばれる過激化した反共運動への対応をめぐって、カレリア学徒会は主要メンバーがほとんど入れ替わる状況に陥った^{*27}。一九三

二年以降のカレリア学徒会は、ラプア運動から派生した極右政党である愛国国民運動（I K L : Isänvaltiinen Kansallike）との連携²⁸を行い、政党政治に関与し始めると一気に政治化の道を進むことになる。

カイラが会長を務めた八年半もの間にカレリア学徒会は急成長を遂げた。一九二二年終わりにはわずか六〇人であった会員が一九三〇年には一〇七五人に増加した（Ahti 1999: 409）。その間、会の方針は首尾一貫していたわけではなく、内部で多くの衝突が起こった。また、徐々に「世代交代」も行われたため、会の「大フィンランド」像も一枚岩ではなかった。

初期にカイラが「ロシア人憎悪」という感情に訴えた「大フィンランド」像は、知識人らが構想した「大フィンランド」像と比較すると稚拙なものだったが、一方で感情に訴える分、求心力を持つものであり、カレリア学徒会初期の「大フィンランド」像を形成する上で大きな影響を及ぼした。

カイラにとって、「大フィンランド」は単に「近親民族」の連帯や領土拡張という地政学的な構想にとどまらなかった。「大フィンランド」は、フィンランド民族存続のため不可欠なものであり、それは「ロシア人憎悪」という感

情を動力として実現されるべきものであった。また、カイラはロシア人や共産主義者だけではなく、ユダヤ人に対しても、さらにはフィンランドにおけるドイツ人やスウェーデン性をも排除したいとする意思があったとされており（Ahti 1999: 407）、外に向かうというよりも内なる統一にこだわりを見せていた側面もあった。以上のように、カイラ

の思想からはヨーロッパ統合という発想は見られない。カイラや初期のカレリア学徒会にとって、フィンランドは「西」、すなわちヨーロッパを「東」から守る障壁であったと同時に、「大フィンランド」そのものがフィンランド本来の姿であった。また、「大フィンランド」は必然的にヨーロッパに含まれるものであった。彼らの「大フィンランド」は、ヨーロッパ統合に相反する構想というよりも、ヨーロッパ統合という発展した形までの想定はしていなかったといえる。彼らにとって、「大フィンランド」というフィンランド民族国家の建国こそが「真の独立」につながるものであり、その先の未来に思いを馳せる余裕はなかったのである。また、彼らにとってヨーロッパは抽象的な概念であり、繰り返しになるが「野蛮な東」に対する「先進的な西」という意味でのヨーロッパという考えにとどまっていた。それゆえ、彼らが描いた「大フィンラン

ド」は、ヨーロッパのなかに位置することを重視した地域構想であるが、その先のヨーロッパ統合という形にはつながっていないからである。

一方、「大フィンランド」は、カレリア学徒会のような右翼団体からのみ発せられたわけではない。内戦期に革命を望んだ勢力である赤衛隊の指導者エドヴァルド・ギツリング（Edvard Gylling, 1881-1938）らは、内戦で敗北した後、ロシア・カレリアへ亡命し、一九一八年八月二九日にモスクワで共産党政権を樹立した。その際、彼は同志と、カレリア人とフィンランド文化の融合および「赤の大フィンランド」「赤の北欧」の実現を目標に掲げた（Kingaspuro 1998: 125）。つまり、「大フィンランド」という思想自体は、その地理的範囲やイデオロギーは論者によって異なるものであるものの、政治的立場を超えてフィンランド人に支持された思想であった。

本稿では、狭い範囲の「大フィンランド」像を取り上げたが、当時のフィンランドが置かれた国際的状況を鑑みる上で一つの示唆となるだろう。

●付記

本研究は、科学研究費補助金・基盤研究（B）「戦間期ヨーロッパにおける国家形成と地域統合に関する比較研究」課題番号2430035（代表：大島美穂・津田塾大学）の助成を受けたものである。

●注

*1 カレリア人だけではなく、エストニア人、フィンランド国境近くに居住するフィンランド語を話すスウェーデン人らを含む場合もある。さらに、ウラル語族という括りでハンガリー人をも含む言説もあるが、通常「大フィンランド」の範囲には含まれない。詳細は、石野（二〇二二）を参照。

*2 「大フィンランド」を、「大セルビア」や「大ルーマニア」といった他のヨーロッパ諸国に登場した地域構想と比較すると、「近親民族」との連帯およびその民族の居住地の合併といった点で共通点が見られ、「大フィンランド」そのものを膨脹思想と断言することはできない。しかし、本稿では、戦間期フィンランドにおける「大フィンランド」を、膨脹主義的な性格が色濃く出ている点に留意して論じる。「大フィンランド」の誕生と変遷についての詳細は、石野（二〇二二）（一九一六）を参照。

*3 東カレリア遠征とは、内戦中白衛隊側の義勇兵が宣戦布告なしで、東側国境を超え、一九一八年三月にロシア・カレリアの主要都市ボラヤルヴィ、レポラ地域を占領し、六月に白海西方の地域を占領したことを指す。フィンランド政府も

この遠征に財政的援助を行うなど、ロシア・カレリアを含めた形でのフィンランド「独立」を目指したが、結局失敗に終わった。

* 4 初代会長には、当時、民族株式銀行 (Kansallis-Osake pankki) に勤めていたカールロ・ハッリコロビ (Karlo Hallikorp, 1884-1934) が就任したが、一年足らずでカイラに会長をゆずった。ハッリコロビは名誉会長の立場にあったため、カイラを「初代」会長とする先行研究も存在する。

* 5 フィンランド国立図書館特別閲覧室のAKSコレクション (AKSn kokoelma) 目録より。他方、他の資料はラハティに送られ、AKS秘書のE・ハータヤによって燃やされたと記されている。

* 6 ただし、モーガンのように、会の活動全体がファシズム的であると断定するのも単純すぎるくらいがある。後述するように、会自体はさまざまな活動を行っており、なかにはファシズムとは関係のない活動も見受けられる。それゆえ、本稿ではカレリア学徒会をファシズム的性質を帯びた右翼団体と定義して論じる。

* 7 一九二七年から二八年まで少し期間が空いているのは、カイラが博士論文執筆に集中するため、五ヶ月の間会長職を離れたからである。その間、ヴィルホ・ヘラネン (Vilho Helanen, 1899-1952) とマルツァイ・イルマリ・カンテレ (Martti Ilmari Kantere, 1895-1970) が会長を務めた。

* 8 歴史家マッティ・クリンゲいわく、カイラは若者のリーダーになった非常に重要な人物であり、カレリア学徒会の組

織の創造者であった (Klinge 1978: 88)。

* 9 Rysa という言葉は、直訳すれば「露助」という侮蔑の表現であるが、本稿では Rysänvaha を「ロシア人嫌悪」、Rysä を「ロシア野郎」と訳す。

* 10 しかし、実際、カイラはヒトラーほどの実力を持ち合わせた人物ではなく、カイラの反ソ、反共主義的な運動は政治に影響力を及ぼすものではなかった。

* 11 このことは、カイラが優秀な学生だったことを意味する。
* 12 実際にどのような文章のやり取りをしていたのかは、資料が残っていないため、明らかにされていず (Ahti 1999: 54)。

* 13 カイラは、独立前にロシア帝国軍に所属し、独立時に対露友好路線をとったフィンランドの英雄マンネルヘイム將軍をも「ロシア野郎」と見なした (Ahti 1999: 155-163)。また、

カイラは保守系の雑誌『市民警備隊雑誌 (Suojeluskunnan Lehti)』および『言葉と剣 (Sana ja Miekka)』の編集長を一九二四―二六年まで務めた。

* 14 三人の創設メンバーであるエリアス・シメリウス (Elias Simelius, 1899-1940) 一九二六年に Simojoki とフィンランド語姓に改名)、レイノ・ヴァハカリオ (Reino Vahäkallio) 出生没年不明)、エルッキ・ライッコネン (Erkki Räkikönen, 1900-1961) は、全員東カレリア遠征の参加者であった。

* 15 しかし、翌年の一九二一年に、ソヴィエト側はロシア・カレリアにソヴィエト制を敷き、それに抵抗したカレリア人を鎮圧した。フィンランド政府はこの措置に対して国際連盟の常設国際司法裁判所に提訴したが、効果はなかった。

* 16 当時、ウイエナ・カレリアからの難民が一四万人以上フィンランドに流入したとされる (Ahti 1999: 255)。

* 17 一九二三年にはすでに七四人の会員が二〇〇地区を巡回したという。また、ポストカードも同年五〇万枚を売り上げたという。ポストカードには「カレリアのために (Karjalain puolesta)」という語句が書かれ、カレリアの風景や人物などの写真と詩が印刷された (Eskelinen 2004: n.p.; Ahti 1999: 356)。

* 18 カレリア学徒会では、フェンノマンの創始者スネルマンの誕生日 (五月二二日) フィンランドでは「スネルマンの日」として現在でも祝われている。にヘルシキの公園にある銅像まで行進する行事があった。

* 19 女子学生に対しては、一九二二年一〇月にカレリア学徒会の女性部としてカレリア女子学徒会 (Kaisiöpiipäiden Karjala-Seura) が発足した。なお同会は、一九三八年にカレリア女性学徒会 (Akateemisten Naisten Karjala-Seura) と名称を変更した。

* 20 カレリア学徒会の創始者メンバーの一人であるヴァハカリオは、一九二一年一月にカイラに会ったとき、剣が交差したカレリアの旗とともに、「悪魔と『ロシア野郎』に對抗して (Piru ja Rysän vastaan)」という文字が書かれた T シャツを着ていたと回想するなど、当時、カイラは反ソキャンペーンで注目される存在であった。また、「悪魔と『ロシア野郎』に對抗して」というスローガンは、「憎悪の兄弟」のスローガンとして再び使われた。

* 21 「憎悪の兄弟」は秘密組織とされたが、当時のカレリア

学徒会では大きな勢力であった (Eskelinen 2004: 87-93)。

* 22 叙事詩『カレワラ』の原詩である口承詩は、主にロシア・カレリアで採集されたが、一部はイングリシアやフィンランド領カレリアでも採集された。

* 23 「西洋諸国 (jämsmaat)」は西 (jämsi) の国々 (maat) を指し、板橋論文で言及されている「西洋 (Abendland)」とは語源的には意味は異なる。

* 24 「どんな色」というのは、どんな政治心情であろうともという意味だと解釈できる。また「『ロシア野郎』に死をー」という言葉は二度綴られている。

* 25 会員である民俗学者マルツァイ・ハーヴィオ (詩人名ムスタバー) が指導的役割を果たした。詳細は、石野 (二〇一二: 一七〇―一八四) を参照。

* 26 カイラは、主に会の外でフィンランド軍の「浄化」作戦、すなわちロシア帝国時代の将校たちを軍から一掃しようとする活動にのめり込んでいた。またカイラは、一九二五年にカレリア学徒会から出版された『フィンランドの民族性問題』で、「我々の防衛軍におけるロシア性」という短い論考を寄せるなど、会内でも自身の主張を表明したこともある (AKS 1925: 63-69)。この点については今後の課題としたい。

* 27 マンツァラ蜂起は、一九二〇年代末から一九三〇年代初めにおいて発生したラプア運動が過激化した事件である。ラプア運動とは、ボスニア湾西岸の保守的地域であるラプアで、農民が共産党の集会を襲撃したことからはまった運動であり、共産党の非合法化の要求にまで発展した。一九三〇年

に実際に共産主義運動取締令が国会で可決されるなど、ラプア運動の政治への影響は大きいものであった。また、世論の支持も受けていたが、ラプア運動が過激化するにつれてフィンランド政府および世論の支持を失っていった。しかし、過激化したラプア運動を支持する一部のフィンランド人兵士が、一九三三年二月末にヘルシンキ近郊のマンツァラでクーデターを起こし、政権転覆を図った。これがマンツァラ蜂起である。当時のスヴェインフッヴ大統領が投降を呼びかけ、蜂起は失敗に終わった。反共運動を支持していた会員の多くは過激化するラプア運動についていけず、ラプア運動支持を表明していた会を離脱した。

* 28 I K L に活動の場を移した会員も多かった。

●参考文献

【定期刊行物】

Suomen Heimo

Ylioppilaslehti

【史料集・二次文献】

石野裕子(二〇一三)『「大フィンランド」思想の誕生と変遷——叙事詩カレワラと知識人』岩波書店。

デイヴィッド・カービー(二〇〇八)『フィンランドの歴史』

百瀬宏・石野裕子監訳、明石書店(Kirby, David(2006) *A Concise History of Finland*, Cambridge: Cambridge University Press)。

Ahti, Martti (1999) *Ryssän Vihassa. Elmo Kaila 1888-1935*.

Porvoo: WSOY.

Akateeminen Karjala-Seura (1923) *Suursuomi on yhtä kuin isänmaa*. Helsinki: Akateeminen Karjala-Seura. (本文中で「AKS」)

Akateeminen Karjala-Seura (1925) *Suomalaisia kansallisuuskyynyksiä*. Kouvolan kirja ja kivipaino oy.

Aapuro, Risto (1973) *Akateeminen Karjala-Seura. Ylioppilaslehti ja kansa 1920-ja 1930-luvulla*. Porvoo: Werner Söderström Osakeyhtiö.

Eskelinen, Heikki (2004) *Me tahdoimme suureksi Suomeksemme. Akateemisen Karjala-Seuran historia I*. Helsinki: WSOY.

Hämäläinen, Pekka Kalevi (1968) *Kielitietelu Suomessa 1917-1939*. Porvoo: WSOY.

Kangaspuro, Markku (1998) "Nationalities Policy and Power in Soviet Karelia in the 1920s and 1930s." in: Tauno Saarela and Kimmo Rentola (eds.), *Communism: National & International*. Helsinki: SHS.

Klinge, Matti (1978) *Ylioppilaskunnan historia: 4 1918-1960*. Porvoo: WSOY.

Klinge, Matti (2012) *Vihan vejet ja kansallinen identiteetti*. Helsinki: Finnprinters.

Morgan, Philip (2003) *Fascism in Europe, 1919-1945*. London: Routledge.

Mytly, Juhani (2004) "Kaila, Elmo Edvard (1888-1935)." *Suomen*

●著者紹介

①氏名……石野裕子(いしの・ゆうこ)。

②所属・職名……常磐短期大学・准教授。

③生年・出身地……一九七四年、神奈川県。

④専門分野・地域……北欧近現代史、フィンランド。

⑤学歴……フェリス学院大学文学部(文学)、津田塾大学大学院後期博士課程満期退学(国際関係学)、博士(国際関係学)。

⑥職歴……大学助教(三二歳、二年)、研究員、大学非常勤講師(三四歳、四年)、博士研究員(三八歳、一年三ヵ月)。

⑦現地滞在経験……フィンランド・ハーバヴェシ(二〇歳、一年、ボランティア留学)、フィンランド・ヘルシンキ(二七歳、一年、政府奨学金受給生として)。

⑧研究方法……主に、歴史家、民俗学者、文学者などの知識人が書いたテキスト分析だが、並行して政治史、国際関係史といった歴史的な分析を行っている。

⑨所属学会……日本国際政治学会、バルト＝スカンディナヴィア研究会、Society for the Advancement of Scandinavian Study、研究上の画期……学部三年生のときのフィンランドへのボランティア留学。フィンランド人家庭に一年間ホームステイしながら、幼稚園、小学校などでボランティアを行った経験はすべてが新鮮で、私の人生観を変えた。私にとってのフィンランドは、ムーミンでもデザインでも教育でもなく、えんえんと広がる森、そこに住んでいるホストファミリーのような市井の人々である。そのような一般の人々が、歴史の転換期にどのような行動をしたのに関心を持って研究している。

⑩推薦図書……拙著『「大フィンランド」思想の誕生と変遷——叙事詩カレワラと知識人』(岩波書店、二〇一二年)。

kansallisbiografia 4, Helsinki: SKS.

Tommila, Päiviö (ed.) (1989) *Herttä Suomi: suomalaisusliikkeen historia*. Kuopio: Kustannuskilta Oy.

Uola, Mikko (ed.) (2011) *AKS:n tie: Akateeminen Karjala-Seura isänmaan ja heimoaateen asialla*. Helsinki: Minerva.

Virtanen, Matti (2005) "Adolf Hitler ja Elmo Kaila." in: Tommi Hoikka, Sofia Laine, and Jyrki Laine (eds.), *Mitä on tehtävä?: Naorison kapinan teoriaa ja käytäntöä*. Helsinki: Loki-Kirjat